～A班　班活動～
テーマ　：　茨木市立文化財資料館　－　弥生時代の銅鐸鋳造技術考察
日時　　：　１０月２日(月)　12:40～14:3０

南茨木駅近くにある茨木市立文化財資料館を訪ねました。
弥生時代になると金属器を生産し、使用するようになる。茨木市南部の東奈良遺跡は、弥生時代の大規模環濠集落であり、この工房跡から銅鐸の鋳型が出土しています。
ここの資料館には、本遺跡から出土した完全な形を保った銅鐸鋳型（石製）レプリカや鋳造用具が展示されており、日本列島における弥生時代の青銅器鋳造を考えるうえで重要な資料です。
また、東奈良遺跡を中心に大阪平野北部の鋳造技術を伺いしることができます。

〇資料館前にて

＊訪問日は、東奈良遺跡
銅鐸鋳型発見 50 周年
事業開催期間でした

〇銅鐸鋳型、銅鐸

＜銅鐸鋳型:石製＞

＜５０cm を越える大型銅鐸＞

○銅鐸鋳型、生産道具

＜鋳型への練込みの様子＞

＜送風管:熔銅時に使用＞

＜高杯型土製品＞

＊熔銅を鋳型に流し込む時に用いる容器。（土器を炉とし使用。容量も正確に計量されていたようであり、古代技術の高さを伺い知る事ができる）

○展示を見終えて

- 東奈良遺跡工房で生産された銅鐸は近畿一円でも発見されていることから、この集落が、奈良県唐古・鍵遺跡と並ぶ当時の日本の最大級の銅鐸や銅製品の生産拠点であったようである。また、この集落は弥生時代の数多くの「クニ」の中でも各地に銅鐸を配布することができるほど技術的に政治的にも重要な位置を占めていたことが伺える。
- この出土した銅鐸の鋳型の石材は六甲山西の地域より採取されたもののようであり、その入手・運搬には大きな労力が必要であったにも関わらず、なぜ、銅丈の鋳型は土製なのに、銅鐸の鋳型は石製なのか非常に興味深い。
- やがて祭祀で用いる道具としての役割を終えた銅鐸の生産は終焉を迎え、鋳造技術は銅鏡への生産と移り変わるとともに、時代は古墳時代へと入り、大きな時代の転換点を迎えていくこととなる。

（文責:班長）